

キリシタン文献における 日本語のローマ字表記の意義

根 岸 亜 紀

1. はじめに

キリシタン文献とは、イギリスの大英図書館などに保存されている、主に、外国（日本）におけるキリスト教の宣教活動のために編纂された文献資料のことであって、歴史的には、中世末期（あるいは近世前期と言うべきだろうか）の日本語の実際の姿を忠実に写し出している資料である。

宣教活動のために編纂されたことには変わりはないが、キリシタン文献には、教義書・語学書・辞書など体裁や書式などにさまざまな種類がある。また、用字についても、漢字仮名が使われているものもあるが、ローマ字を使用した文献資料も多く存在する。今回は、そのなかでも、特に日本語学習のテキスト・語学書に対象をしばって、キリシタン文献における日本語のローマ字表記の意義について考察を進めていきたい。

2. イエズス会の日本語学習

室町時代、日本にキリスト教を布教させようと、ポルトガル人宣教師が来日した。しかし、その頃の日本では仏教が主流であり、日本人に異国の宗教であるキリスト教を広めるのは簡単なことではなかったであろう。フランシスコ・ザビエルらが所属するイエズス会は、外国での布教活動にあたっては、その国の言語で行なうことを主義としていた。当然、日本での宣教活動も、日本語で行なうことになっていた。したがって、宣教師たちは、日本語を用いて民衆に説教を行ない、日本人の話すことばを聞き理解しなければならない。効果的に宣教活動を行なうためには、日本の文化や風俗にも通じていなければならない。そのためには、日本の文化や風俗を含めた日本語の勉強をしなければならなかった。しかも、「読む・書く」よりも、宣教活動にいかすためのより実践的な「話す・聞く」ことに主眼を置かねばならなかった。宣教師たちは、キリスト教を効果的に広めるために、日本人を目の前にして、日本人にかぎりなく近い発音で日本語を話し、日本人の話すことを聞き理解しなければならなかったのである。

「話す・聞く」ための日本語習得を目指すには、どのような学習方法をとれば

いいか。できるだけ日本人に近い日本語を習得するには、当時の日本人の話す日本語の発音を正確にとらえ、それを自らが再現できるようにすればいいのである。

イエズス会は、日本人信者の力を借りて日本語学習に努めた。その過程のなかで、日本語学習のためのテキストや語学書（辞書・文法書）を編纂した。民衆に、異国の宗教であるキリスト教の教えを説くためには、まったく聞き慣れない題材よりも、当時の日本人の広い層が知識として持っているものを例として用いながら進める方がより効果的である。そのため、テキストの題材も、当時の日本人がよく知っている物語や金言名句が用いられた。ただし、当然のことながら、ポルトガル人宣教師は、日本の漢字仮名を読み理解するための知識はない。そこで、自国のポルトガル語式ローマ字表記が用いられたのである。

日本語学習のテキストとして知られているのは、「天草版平家物語」「天草版伊曾保物語」「天草版金句集」であるが、これらはすべて、日本語の文章がポルトガル語式ローマ字表記で表されている。各書の詳しい説明は省略するが、大まかな特長をあげておく。「天草版平家物語」は、古典「平家物語」をもとにした大まかな概略がおさめられている。そのなかから（当時の民衆が常識として持ち合わせていたと思われる）日本の文化・風習・風俗を知識として得たものと思われる。しかし、仏教色の濃い「平家物語」からそのままをとるのは、キリスト教布教という目的に合わない。そこで、仏教思想が色濃く表れている箇所や人物が登場する際の名乗りなどの部分は、身につける必要がないものとしてけずられている。「天草版伊曾保物語」は、西洋の「イソップ物語」を題材にした「伊曾保物語」がもとになっている。動物が登場する寓話をあげ、そこから得られる教えを添えたものが記述されている。ここから、キリスト教説教をより効果的に行なうための具体的な題材をとったものと思われる。「天草版金句集」は、やはり当時の日本人が知識として身につけていたものと思われる、漢籍などからの金言名句をあげ、それをより詳細に解説したものを添える形で編まれている。これも、説教を行なう上で、例として挙げたものと推察される。

「話す・聞く」という、より実践的な日本語習得のためのテキストにローマ字を使用することに、どのような効果があるのか。

3. ローマ字の特徴と意義

そもそも、日本語を「ローマ字表記する」ということには、どのような意義があるのか。

ここで、キリシタン文献からは外れるが、キリシタン文献における日本語のロー

マ字表記の意義を考えるうえで、ローマ字そのものの特徴と、その周辺（世界のなかでの幼児への文字指導、また外国語学習の観点から）を少しみてみたい。

ローマ字は、まず第一に、単音を表記する単音文字（音声を母音や子音などに分析して表記する）である。その文字の持つもともとの音がわかっているならば、ローマ字で綴られたものは、たとえ自国のことばでなくとも、そのまま正確に発音することが可能になる。また、ローマ字は、いわゆる分かち書きという方式によって、単語を明示する文字である。そのために、個々のスペルの分かち書きに注目すれば、書かれたもの（それを書いた／編纂した人物）の単語意識も推察することができるのである。

このローマ字（キリル文字）を含め、アラビア文字、インド文字の系統、韓国のハングル、また中国で使われるピンインなどは、単音文字の系統である。このような国々では、すべて「単音」を意識できる文字組織になっていると言えるだろう。つまり、どこの国でも、幼児への文字指導は、「単音」を意識化させるという方式を前提として実現されているのである。母語の文字を指導することが、そのまま、母語の科学的な音声教育を実現させているのである。

ここで、日本の場合をみてみたい。漢字使用を取り入れた日本では、永い歴史のなかで、仮名文字という表音文字を発明してきた。仮名文字は、日本語の音節を表記するために発明してきたものだけに、日本語の音声の表記には最適のように思われている。しかしながら、仮名文字は、音節表記の文字（「母音」や「子音+母音」などの音節を表記する）であって、単音文字ではない。したがって、仮名文字を修得する日本の幼児たちは、音節は意識できても、単音を意識することなく生育してしまうものなのである。単音を意識化せずに生育してしまうという日本の子どもたちの現実が、言語教育の観点から言えば、深刻な問題となるはずなのである。

近隣の韓国、中国に注目してみれば、自国のハングルやピンインを使用した文字教育を行なうことで、幼児は、自然にまた明確に母語の単音を意識化できるように教育されている。つまり、単音のレベルとしての母音や子音などを科学的に指導されているのである。筆者の周辺にも、中国や韓国から留学した日本語学習者を見かけるのだが、幼児時代の母語の母音や子音の意識化が外国語としての日本語の修得に生かされているように感じられてならない。

世界の国々のなかで、日本の幼児教育だけが単音への分析・指導を実践していないのである。仮名文字指導という「音節」の段階で停滞している。言語の教育にとっては、幼児時代の修得が特に重要なはずなのだが、日本では、単音を意識

化させるというような科学的な音声教育を完全に拒絶してしまっているのである。よく、日本人は、世界各地の人たちと比較して、外国語の修得に不得意だと言われている。そのことの理由の一つとして、幼児時代の音声教育の不完全さ（特に、単音を意識化できないこと）を挙げなければならないことだろう。

このような実際をみてくると、「単音」を意識させる単音文字であるローマ字の知識を持つということは、未知の外国語の習得に大きな役割を果たしているのである。

4. 室町時代の日本語の特徴とポルトガル語式ローマ字表記

つぎに、キリシタン文献にみられる“ポルトガル語式ローマ字表記”について触れておく。

宣教師たちが用いた自国のポルトガル語式ローマ字表記は、当然のことながら、現行私たちが目にするローマ字綴りとは異なる部分がある。それは、当時のポルトガル語の発音・表記法を基本とするポルトガルで使われていたローマ字を、日本語にあてはめているからである。

キリシタン文献において、耳で聞いた日本語の発音どおりにあらわしたローマ字表記は、室町時代当時の日本語の特徴をつかみ、それを見事に表していると思われる部分がある。また、日本語学習を進める上で、文法の面でその使用に注意すべきであると考えられる箇所を、ローマ字表記の使い分けで表している部分もある。ここでは、それらがよくわかる部分を、「天草版平家物語」を資料として具体的に挙げてみる。なお、文中「 」内にあらわすローマ字表記は、実際に「天草版平家物語」本文中に出てくる表記であり、用例出現箇所を（ ）内に、巻数・ページ・行の順で記した。また、それぞれの特徴について記述されている『日本大文典』の対応箇所を添えた。

『日本大文典』より

○ポルトガル語及びラテン語の持っている文字、又二字の綴字で、五つの母音の何れかに終り、或いは又、子音の N、M、T に終るものは、日本の言葉なりその発音なりの上にすべて備わっている。ただ文字で L と二重音の R とがなく、綴字で Ti、di、tu、du、se、si、ce、ci、va、ve、vi、vo、vu、ze、zi を欠く。尤も va、vo はあるが、それは子音である場合に我々が発音するようなものでない事は後に述べる通りである。流音である場合にも、R 及び L を用いないので、四字及び五字の綴字もすべて欠けている。

○この国語を我々の文字で書くのには、主としてラテン語の綴字法及びポルトガル語の綴字法に従う。それは日本語の発音が、(略) 或綴字でポルトガル語

のと類似しており、且又、日本では伴天連も伊留満も彼等の間ではポルトガルの言語及び綴字法を用いているからである。

○既に述べたように、日本語のあらゆる綴字は母音か、子音の N、T かに終る。例えば、Ban (バン)、ben (ベン)、bin (ビン)、bon (ボン)、bun (ブン)、bat (バッ)、bet (ベツ)、bit (ビツ)、bot (ボツ)、but (ブツ)、等。

ア行

ア行で特に注目したいのは、エとオである。ア、イ、ウは、それが単独で使われても、子音と結合して使われても、その形を変えないが、エ、オは、単独で使用される場合と子音とあわさった場合とでは、その形が異なる。エ、オが単独で使われる場合には、「ye」、「vo・uo」と子音を伴ってあらわされる。これは、それぞれが単独で出てくる場合、「y (/j/)」、「w (/w/)」を含んだ音をあらわしているためと思われる。

○母音の文字はただ A (ア)、I (イ)、V (ウ) だけであって、他の二字の綴字は ye (エ)、vo (オ) である事を知って置く必要がある。…

その他に特徴があるのが、イの表記である。イの音には、「i、j、y」三種類のローマ字があてられている。イ音をあらわす場合、最も基本的なものは「i」である。「i」は、母音音節にも、それ以外の音節にも用いられるが、「j、y」は、母音音節に限られる。二重母音でイイとイ音が重なる場合などに、「j、y」が用いられる。「y」は、語中語尾には母音のあと、特に「i」のあとにおかれる傾向にある。この「j、y」が用いられている場合も、ところによって「i」の文字であらわしているところもあるため、「i、j、y」それぞれに音の違いはないと思われる。表記をするにあたっての、便宜上のものであると思われる。

○Y の字は、語中にあっても語末にあっても、主として Gu (グ) の次であって、それ自身で一つの綴字となる場合に使われるのが本来の用法である。例えば、Vguysu (鶯)、Taguy (たぐい)、Vôguy (大喰い)。又、その他の如何なる文字の前又後にあっても、特別の意味を持っている時、換言すれば一言又は一語をなす場合に用いられる。例えば、Yxei (威勢)、ycon (遺恨)、guioy (御意)、buy (武威)、meiy (名医)、côy (高位)、y、yru (居、居る)。

また、ウは「v」と「u」とがある。どちらもウの音をあらわすが、「v」は主に語頭で、「u」は主に語中で使われる。「v」は語中でも出てくるが、その際は、複合語の後接語頭に位置しているため、やはり語頭に出てくる性質には変わらないものと思われる。これもまた、表記上の便宜的なものであって、文字によってその音に違いはないようである。

Azzumavotoco 東男 (巻 4 p.349・ℓ 2) Qijno Niy 紀伊二位 (巻 4 p.397・ℓ 20)
vuou 魚 (巻 1 p.86・ℓ 2) yeigua 栄華 (巻 1 p.3・ℓ 6) vouoqu 多く (巻 1 p.
84・ℓ 11)

カ行

カ行は全体にわたって、現行のものとは大きく異なる。

まず、ポルトガル語では、k の字を欠く。そのために、カ行の音をポルトガル語式のローマ字で表すとすれば、「ca、qui、cu、qu、que、co」というように c と q を用いてあらわすことになる。

クについては、「cu」と「qu」の二種類が使われているが、「qu」は特に活用語の活用語尾にク音が出てくる際にあらわれる。その他の一般的なク音の場合(名詞や、活用語中の活用語尾以外に出てくる場合)は、「cu」が使われている。このク音の c と q のあらわし分けに関しては、文法的な学習をするにあたっての便宜上のあらわし分けであり、その音に特に差はないとみられる。

○Qu の綴字は動詞を書くのに使われる。例えば、Quiqui、quiqu (聞き、聞く)、ataraxiqu (新しく)、等。Cu は名詞に使うが、それは変化しないからである。例えば、Quicu (菊)、Sacu (作)、Tocu (得)、等。

ポルトガル語において、「ca」、「co」は/ka/、/ko/の音をあらわす。しかし、ci、ce は/si/、/se/の音をあらわしてしまうために用いることができない。そこで、「qui」、「que」を用いたのである。また、「qui」が「qi」、「que」が「qe」とあらわされることがあるが、特に音の差はない。ただし、ポルトガル語において、q は常に u を伴い、他の母音には直接続かないという性質があるため、「qui」、「que」が一般的であり、「qi」、「qe」はその省略した形のようなものである。

いずれにしても、音は k を使用したものと変わりがないものと思われる。ちなみに、現在使用されているポルトガル語において、k は、外来語にしか使用しないようである。

なお当時は、“カ”だけではなく“クッ”の音も語中で使用されている。これは「ca」と区別をし「qua」のかたちであらわされている。

Cucocu 九国 (巻 1 p.87・ℓ 19) yuquye 行方 (巻 1 p.84・ℓ 6) na-/qunaqu
泣く泣く (巻 1 p.84・ℓ 7-8)

ガ行

ガ、グ、ゴについては、特にことわる点はない。ここでみておきたいのは、ギとゲについてである。

ポルトガル語において g は、i、e の前では/sh/の有声音であることから、「gi」は「ji (ジ)」に通ずる音、「ge」は「je (ゼ)」に通ずる音になってしまう。そのため、カ行 (ca qui cu/qu que co) の「キ・qui、ケ・que」にした

がって、「ギ・gui、ゲ・gue」としたものと思われる。

なお、カ行でみたように、“ガ”だけではなく“グッ”の音が語中で使用されている。これは「ga」と区別をして「gua」のかたちであらわされている。

カ・ca キ・qui ク・cu/qu ケ・que コ・co
ガ・ga ギ・gui グ・gu ゲ・gue ゴ・go

Guiichi 妓一 (巻2 p.94・ℓ9) guenzan 見参 (巻3 p.182・ℓ19)

サ行

サ、ス、ソには一般的にr (ロングエス) が使われる。このrとsは、その音には違いがないと思われる。

サ行において特にみておかねばならないのは、シとセについてである。シとセの音に、「xi、xe」とs (r) ではなくxが使われている。ポルトガル語でxは/sh/ [ʃ] の音をあらわす。つまり、「xi」は/shi/ [ʃi] の音であることを、「xe」は/she/ [ʃe] の音であることをあらわしていたことになる。しかし、ポルトガル語においてseは存在していた。それにも関わらず、あえて「xe」を用いたのは、当時のセの音がシェに近かったことを表記の面であらわしていたのではないかと思われる。

(九州方言／東国方言)

Xiguefira 重衡 (巻4 p.257・ℓ12) xechiye 節会 (巻1 p.8・ℓ9)

ザ行

ザ行では、ザ、ズ、ゾにzが、ジ、ゼにjがつかわれている。ポルトガル語では、jは/sh/音の有声音をあらわす。そのため、/sh/をあらわすxを使用したサ行の「シ・xi」、「セ・xe」にしたがい、「xi→ji」、「xe→je」にしたと思われる。また、zeは存在するにも関わらず、「je」を使っているところから、ゼはジェに近かったことをあらわしていたのではないかと思われる。

サ・fa シ・xi ス・fu セ (シェ)・xe ソ・fo
ザ・za ジ・ji ズ・zu ゼ (ジェ)・je ゾ・zo

jinxeqi 人跡 (巻1 p.80・ℓ1) suzuri 硯 (巻1 p.92・ℓ7) jefitomo ぜひとも (巻1 p.15・ℓ21)

タ行

タ行のタ、テ、トについては、特にことわる点はない。ここでみるのは、チとツである。

チはtiではなく「chi」になっている。現在のポルトガル語では、「chi」は/shi/つまりxiの音をあらわすが、昔の「chi」は/tshi/をあらわした。ツに使われているçuは、ポルトガル語で/su/の音をあらわす。つまり「tçu」で/tsu/の音をあらわしていることになる。

chichigoje 父御前 (巻4 p.385・ℓ10)

ダ行

ダ行では、ダ、デ、ドに d を、ヂに g を、ヅに zz を使用している。

ヂにあてている「gi」であるが、これはポルトガル語では、「ji」と同じ音(ジ)をあらわす。しかし、あえて異なるローマ字を用い「gi」とあらわしていることから、ここではジの音と区別をしているのだと思われる。当時まだ区別があった「四つ仮名」⁽¹⁾をローマ字表記でもあらわし分けているのである。ヂをジと区別し、音をあらわすローマ字表記においてもジ「ji」と区別をし「gi」を使用しているのである。同様に、ヅもズ「zu」と区別し、「zzu」を用いてあらわしている。ポルトガル語には「zzu」の綴りはなく、ヅの音をあらわすための造字である。「zu」に似てこれとは別な音という意味、で「zzu」としたものと思われる。

gixin 地震 (巻4 p.366・ℓ3) togicomotte とぢこもって (巻1 p.83・ℓ3) fazzu
caxij はづかしい (巻1 p.52・ℓ18) mizzu 水 (巻3 p.162・ℓ10)

○日本語の発音には我々の持たない綴字が二つある。それらはあらゆる方法の中で最も適した方法で書かれねばならない。その中の一つは我々の Tu に当るものであって、Tçu (ツ) と書かれるが、最初に T が響き次いで C が響くからである。他の綴字は従来 Zzu (ヅ) と書かれたものであって、その書き方は決して日本の自然の発音に適応したものではない。だからして Dzu (ヅ) と書かねばならない。何となれば、Tçu (ツ) で T と C とが響くように、この綴字に於いても、D と Z とが響くからである。その上に、Tçu (ツ) の綴字の変化して出来た‘にごり’ (nigori) では dzu (ヅ) となるのであって、文字の上でも亦 T が D に、C が Z に変るのである。例えば、Ta (タ)、te (テ)、to (ト) が Da (ダ)、de (デ)、do (ド) に、ça (サ)、ço (ソ)、çu (ス) が Za (ザ)、zo (ゾ)、zu (ズ) になる。かくして今までのように Zzu と書くよりは Dzu と書いた方が正しいのである。更に又、我々の綴字法に於いては、語頭が同一の子音二つを以て始まることは全くないのである。○Tçu (ツ) と Dzu (ヅ) の音節は、この国語に於いて、Tu、Du の音節に当るものである。われわれはこれに似た発音を持っていないから、これを如何に発音すべきかといふ事は、実地の発音と練習とに任すの外ない。

ナ行

ナ行については、特に問題とすることはない。

ハ行

ハ行は h を使用せずすべて f を使ってあらわされている。これは、当時の音が h [h] 音ではなく、f [Φ] 音だったことをそのまま表記においてあらわして

いるということになるだろう。ただし、ポルトガル語では、hの文字は使用しても、その音は発声しないという決まりがある。そのため、室町時代当時一般的に使われていた日本語の実際のハ行はh音であっても、自国のローマ字表記法(hは発音をしない)の原則にしたがってfの文字を使用した、とも考えられる。

Fachimandono 八幡殿(巻3 p.157・ℓ7) Fauagojen 母御前(巻4 p.357・ℓ17)

Fiqi cazzuqu ひきかづく(巻2 p.130・ℓ10) fugui 不義(巻1 p.46・ℓ20)

Feiqemonogatari 平家物語(序 p.2・ℓ17) Fotoqegoje 仏御前(巻2 p.101・ℓ10)

バ行

バ行については、特に問題とすることはない。

パ行

パ行については、特に問題とすることはない。

マ行

マ行については、特に問題とすることはない。

ヤ行

ヤ行のイ、エは特にあげられていない。エに関しては、ア行であがっている「ye」がくると思われるが、イに関しては、必ずしも「y」が対応するとはいえない。「y」はイ音の表記のひとつであり、ヤ行の子音としてのyという働きはないと思われる(yを用いるイは、ア行の箇所でもふれたように、イイと二重母音になる際に「i」に重ねて用いられる働きがある。特にヤ行のイとして考えられたものとはいえないと思われる)。

ラ行

ラ行については、特に問題とすることはない。

ワ行

ワ行は、ワに二種類の表記があるわけだが、「va」も「ua」も、v、uの綴りの違いによって、その音には変わりはないようである。ワが語頭にくれば「va」であり、語中・語尾にくれば「ua」となるという使い分けだけである。v・uに/w/の音が含まれているために、これで/wa/の音をあらわしていると思われる。

ここでは特に、キ、ウ、エ、ヲはあげられていない。ヲに関しては、ア行のオ(「vo、uo」)を同様に使用できると考えられる。つまり、ア行のオも、ワ行のヲも、同様の表記を使うことから、オとヲは文中ではひとめで見分けがつくわけではない。

○Va(ワ)、Vo(ヲ)の綴字に於いてVの字は本来子音ではない。従って我々のVaのように、唇を強く打って発音してはならない。それとは違った方法で、Vにいくらか触れてA又はOに落ち着くような、子音と母音とのほぼ中間にあたる発音の仕方をしなければならない。

vataçuxi 私 (巻1 p.5・ℓ16) Yoxitçuneua 義経は (巻4 p.354・ℓ24)

fayavma vomotte 早馬をもって (巻4 p.226・ℓ8) minicui monouo 醜いものを (巻4 p.307・ℓ2)

撥音ン

撥音ンを表す表記は、「n、m、~」の三種類ある。「n」は、語中であっても語末であっても使用される。また、その前や後ろにどんな文字がきても使われる。「~」は、母音に付けられる符号である。ポルトガル語では、「~」がついたものは、鼻母音になるのであるが、キリシタン文献資料のなかでは、「~」であらわしたンも、他の箇所では「n」を使ってあらわしていることもあり、「~」と「n」にどうも音の違いはほとんどなかったものと思われる。もうひとつの撥音をあらわす表記である「m」は、b、m、pなどの直前など、あらわれるパターンがほぼ決まっている（すべてが規則的に用いられているわけではなく、例外がある）。そのため、「n」とは音を異にし、「m」そのものの音であったのではないか、と思われる。

○言葉が M、N、又は鼻音を含むとき、それを日本語で‘撥字 (Faneji)’と呼び、その場合には綴字の Mu (む) を用いる。‘ばむぶつ’ (Bamubut、万物) のように書いて、Bambut と読む。

○N が B、M、P の前に来る時は、如何なる場合にも、ラテン語に於けると同じく、M と書き又そのように発音される。例えば、Xemban (千万)、mammam (漫々)、quimpen (近辺)。

Guenji 源氏 (巻3 p.160・ℓ3) varambe 童 (巻3 p.223・ℓ24)

Xunquan・Xū/quan 俊寛 (巻1 p.92・ℓ16, 3-4)

長音

室町時代当時の日本語の長音は、「開音」と「合音」という二種類があり、語による使い分けが残っていたといわれている⁽²⁾。その開合の区別も、長音符号をつくりだして表し分けている。また、長音はウ段とオ段のみにあったとされているため、長音符号のついたものも、ウ段とオ段に限られる (ア段のものについても、それらしき表記がみられるが、はっきりしていない。à、Hà、yà など)。

入声

漢語に見られる入声⁽³⁾ツ (ッ) の部分には、開音節 tçu ではなく、t のみで表されていることが多い。

拗音

拗音についても、今までみてきたような短音節の表記法にもとづいてあらわされている。「ニャ・nha」、「ニョ・nho」の綴りは特殊であるが、これも、ポルトガル語の表記法にしたがった形である。

促音

促音については、現行の表記法とほぼ変わりなく、子音を重ねて綴る。

「-cc- -cq- -dd- -pp- -ss- -tt- -xx- -zz-」

((→ 入声語尾「-t」))

この当時あらわされた、ポルトガル語式綴りのローマ字は、ポルトガル語の発音と表記法にもとづき、当時話されていた日本語の「音（発音）」を忠実にあらわすことが第一に考えられていた。ポルトガル人宣教師が、布教先の国である日本の言語を、まるで日本人のように話す（また、日本人の話している日本語をきちんと聞く）ためには、その当時一般的に話されていた日本語にとにかく近づかなければならなかったのである。そのために、この時代の特徴である「四つ仮名」や「長音の開合」の区別までもを詳細にあらわすために、あらゆる努力と工夫がされているのである。

しかし、これは、あくまで"ポルトガル語の事情（発音の実際・表記法）にもとづいた、ポルトガル人宣教師が日本語を理解、学習（習得）するのに都合がよいように"つくられているものである。

5. ローマ字表記キリシタン文献の資料性

また、キリシタン文献——特に、ローマ字で表されたもの——は、それが編纂された当時の日本語の実際を知るための資料としても貴重なものとされている。

正直な言い方をすれば、中世末期の言語資料は、それ以前（上代や中古など）と比較してみても、無尽蔵に多く残されている。神社仏閣は言うまでもないが、地方の豪族・庄屋などに保存されている資料などは、まだまだ未整理のままの状態のものが少なくない。それほどまでに、中世末期の文献は多く残されてきているのだが、しかしながら、それらの資料は、漢字仮名で表記されたものである。漢字仮名で表記されているのであれば、残念ながら、いかに努力してみても、その当時の日本語の音声の実態を正確に再現することはできない。

イギリスの大英図書館などに残されたキリシタン文献は、「天草版平家物語」など、当時のポルトガル式のローマ字表記によって記録されたもので、そのころに日本で語られていた姿を再現させることができるという意味で（特に、当時の日本語の発音を推察でき、音声体系の実態を再現することができるという意味で）、貴重な資料として残されている。また、個々のスペルの分かち書きに注目すれば、当時の単語意識も推察することができて、その意味でも重要である。ローマ字で

表記されているということは、そのような意義が存在しているのである。

6. まとめ

ここで、あらためてキリシタン文献における日本語のローマ字表記の意義に戻りたい。

今までみてきたように、ローマ字は単音文字であり、分かち書きを必要とする文字である。それは当然のことながら、室町時代に来日したポルトガル人宣教師が使用していた、当時のポルトガル語式ローマ字表記においても言えることである。

未知である外国語学習において、ローマ字が、その習得の大きな力になることは先にみてきたとおりである。これは、自国の文字としてローマ字を持つポルトガル人宣教師たちの場合も当てはまり、布教先の国である日本のことばを学習するために、自国のポルトガル語式ローマ字表記を用い、実践の場で役立つだけの日本語を習得したと考えられる。

「耳で聞いた日本語の音（発音）を、そのまま単音文字であるローマ字で表し、そのローマ字で表した日本語をそのまま発音する」方式で学習することで、かなり日本人に近い発音を可能にしたと思われる。そのため、日本語について知識をまったく持ち合わせないポルトガル人宣教師であっても、テキストの書かれた自国のローマ字表記を、自国の発音どおりにそのまま声に出して読み上げることで、それがそのまま、「日本語を話している」と思わせるほどであったのではないだろうか。

また、分かち書きの部分で単語を意識し、語のまとまりをとらえることによって、話をしていく上での区切りやリズムについても、日本人に近い調子であったと推測できる。分かち書きによって単語の単位を意識することで、日本語の文法現象をとらえることもできたのではないかと思われる。

室町時代に来日したイエズス会のポルトガル人宣教師たちは、布教先の国のことばを用いて宣教活動することを主義としていた。新たな地でキリスト教を布教し、信者を増やすという大きな目的があったため、その国々でのことばの習得に特に力を入れたものと思われる。それは、日本での日本語習得においても言えることである。宣教師たちは、宣教活動に直接に関わってくる実践的な「話す・聞く」ための日本語習得に力を注ぎ、また成果をあげたものと思われる。当時の日本人は、青い目の異国の人間が、目の前で流暢な日本語を話しながら説く異国の宗教の教えに、心から驚き、そして多くの人間が入信したであろう。日本語を使用していた宣教活動は、大きな効果があったものと考えられる。

しかし、日本語習得の成果は、イエズス会として掲げている「キリスト教布教」という大きな目標の存在だけではなく、やはり自国のローマ字を用いた学習が大きな役割を果たしたのだと言えるだろう。

あらためて言う。ローマ字は、単音文字であり、分かち書きを必要とする文字である。

キリスト教分布の歴史の上で、また、我が国においても、室町時代の言語研究の上で、キリシタン文献における日本語のローマ字表記の意義は大きいとすることができる。

注

(1) 四つ仮名

「じ」と「ち」、「ず」と「づ」の仮名は、現在では一般的には発音の上で区別されることはない。しかし、室町時代の中頃まではそれぞれ異なった音韻を表す文字として混同することがなく、語による使い分けがあった。室町時代末期頃から、発音が似通ったものになり、徐々に両者の混乱が広まり、江戸時代にはほぼその識別が困難になっていた。「四つ仮名」とはこの「じ」「ち」「ず」「づ」という四つの仮名とその音韻の違いのことをいう。

キリシタン資料のローマ字表記においても、一般に「ジ・jiーヂ・gi」、「ズ・zuーヅ・zzu」とそれぞれを表し分けているところから、この当時はまだ「四つ仮名」の規則が残っており、語による使い分けがされていたと考えられる。

現在

ザ行	za	zi	zu	ze	zo
	[dza	dzi	dzu	dze	dzo]
ダ行	da	zi	zu	de	do
	[da	dzi	dzu	de	do]

室町時代末期

ザ行	za	zi	zu	ze	zo
	[za	zi	zu	ze	zo]
ダ行	da	di	du	de	do
	[da	dzi	dzu	de	do]

(2) 長音の開合

室町時代当時の日本語の長音は、ウ段とオ段のみにあったとされている。

ア段、イ段、エ段は、二重母音としてあらわされていた。イ段はイイとして「ij」または「iy」、エ段はエイとして「ei」というようにあらわされていた。ア段のものについては、「aa」というものだけではなく、「à、Hà、yà」などのように符号をつけてあらわされているものもある。

この時代の長音には、「開音（開口音）」と「合音（合口音）」という二種類があり、語による使い分けが残っていたといわれている。この開合の区別は、長音符号をつくりだしてあらわし分けている。この符号がつけられるのは、ウ段とオ段である。拡がる・開くなどの意の「ひろがる」「ò」と、引く・延ばすなどの意の「ひく」「ü」、狭ま

る・縮まるなどの意の‘すばる’または‘すぼる’「ô」というように示される（開合は、複合アクセントに属するとの見解に立って、アクセント符号を組み合わせて、「ö, ô」と写し、ウ段長音には一般的には「ü」と書いたが、「û, û」と写した例もある）。

なお、ア段に附されている符号は、長音符号にあたるものかどうかは、はっきりしていない。

(3) 入声

入声とは、漢字の四声の一つで、韻尾が p, t, k でおわるものをいう。あらわれるのも、字音語に限られ、字音の影響によって、まれに和語にもあらわれたのかとも思われる。その p, t, k の入声音のうち、t 入声音は、室町時代末期の口頭音でも生き続けていたようである。しかし、規範的には入声形を正しいとしながらも、一般的な話しことばにおいては、開音節化の傾向が次第に進んでいたらしい。実際のキリシタン文献資料のローマ字表記においても、同じ語でありながら、入声「t」を用いているものと、開音節「tɕu」を用いているものの二とおりのパターンがあらわれている（混在している）という現象もみられる。

○既に述べたように、日本語のあらゆる綴字は母音か、子音の N, T かに終る。

例えば、Ban (バン)、ben (ベン)、bin (ビン)、bon (ボン)、bun (ブン)、bat (バツ)、bet (ベツ)、bit (ビツ)、bot (ボツ)、but (ブツ)、等。

<参考文献>

『邦訳日葡辞書』土井忠生、森田武、長南実・岩波書店・1980.5.29

『日本大文典』原著者：J.ロドリゲス、訳注者：土井忠生・三省堂

・1995.11.10（復刊第2刷）

『天草版平家物語 対照本文及総索引』本文篇・索引篇 江口正弘・明治書院

・1986.11.20

『天草版平家物語 大英図書館本影印』解題：福島邦道・勉誠社・1994.3.25（再版）

『FEIQU MONOGATARI 翻刻版』溝口博幸・大東文化大学市井外喜子研究室

・2000.11.10

『にっぽんご5発音とローマ字』教育科学研究会・秋田国語部会・むぎ書房・1966.5.30

『室町時代の国語』柳田征司・東京堂出版・1985.9.25

『すべての日本語学習者のための 日本語学の常識』2002年度版

鈴木康之・井上敬子・小嶋栄子・溝口博幸・黒田徹・中野はるみ・根岸亜紀

・海山文化研究所・2002.3.24

「国文学 解釈と鑑賞」平成9年1月号 至文堂・1997.1.1

「音声教育とローマ字—だからローマ字指導は必要だ—」根岸亜紀

「国文学 解釈と鑑賞」平成15年1月号 至文堂・2003.1.1

「ローマ字表記と音韻論—天草版平家物語を資料として—」根岸亜紀

「日本文学研究」第42号・大東文化大学日本文学会・2003.2.25

<参考> 仮名・ローマ字綴り対照表（短音節・拗音短音節のみ）

	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
ア行	a	li,j,y	V,v,u	ye	Vo,vo,uo
カ行	ca <カ> qua <クワ>	qui (qi)	cu,qu	que (qe)	co
ガ行	ga <ガ> gua <グワ>	gui	gu	gue	go
サ行	la	xi	lu	xe	lo
ザ行	za	li,ji	zu	le,je	zo
タ行	ta	chi	tçu	te	to
ダ行	da	gi	zzu	de	do
ナ行	na	ni	nu	ne	no
ハ行	fa	fi	fu	fe	fo
バ行	ba	bi	bu	be	bo
パ行	pa	pi	pu	pe	po
マ行	ma	mi	mu	me	mo
ヤ行	ya		yu		yo
ラ行	ra	ri	ru	re	ro
ワ行	Va,va,ua				
撥音ン	n,m, ~				
拗音	qia				qio,qeo
	guia				guio
	xa		xu		xo
	la,ja		lu,ju		lo,jo
	gia				gio
	cha				cho
	nha				nho
	fia				fio
	bia				
	pia				
	mia,mea				
	ria,rea				rjo

※ 本稿執筆にあたり、わたくしをローマ字研究の世界に導いてくださった鈴木康之教授に、多くのご教示を賜りました。深く感謝申し上げます。